

## 新刊紹介

岩清水 由美子

### 山本薰著『裏切り者の発見から解放へ——コンラッド前期作品における道徳的問題』大学教育出版、2010年、133頁

山本薰氏の本書は、2000年3月に提出した博士論文に手を施し、単著としてまとめられたものである。参考文献の出版年からも明らかのように、新しい文献を加え、10年後の視点から部分的に書き換えられたものである（この10年間でコンラッド研究が随分進んだことを考えれば、著者自身の成長に加え、修正・加筆は当然であろう）。コンラッドの創作期は、通常、前期と後期に分けて考えるのが一般的であるが、著者は「秘密の共有者」までを前期と捉え、6つの長編小説と短編小説を対象に、コンラッドの作品に繰り返し表れる「裏切り」という主題を、物語の内容としてだけでなく語り手の問題として捉え、考察し、コンラッド文学における重要な問題の解明を試みている。

第1章で著者は「闇の奥」を取り上げ、この作品を「裏切り者」の発見の物語と捉え、マーロウがアフリカの奥地への探検の旅を語ることによって、「裏切り者」としての自己を発見する物語と位置づけている。語り手マーロウは、ネリー号上で船乗りの世界を引退した仲間にアフリカへの旅を語るが、彼らは現在の職業が示すように、大英帝国の植民地経営を支える仕事をしている。アフリカ奥地に向かう旅の中で、植民地事業に何の疑問も持たない白人達とは違う目で仲間の仕事とその犠牲者を見るマーロウは、白人達の間で次第に疎外感を感じていく。そのような中で最終的にマーロウが目にしたクルツは、白人としての行動規範を逸脱して蛮行に耽り、病気でやつれた姿であった。マーロウは植民地主義の理想のレトリックを見破っていながら、それをクルツに当てはめて判断しようとはせず、クルツへの忠誠心は揺るがない。著者はマーロウのこのような裁きへのためらいを、判断の根拠そのものへの疑惑と捉えている。著者は判断しないという

マーロウの判断をひとつの信念と捉え、あえて判断したクルツに忠実であろうとしたマーロウは、既成概念への「裏切り者」であったとしている。

第2章の『ロード・ジム』論では、コンラッドは「闇の奥」でマーロウが回避した「裁き」の問題を中心に掘え、「闇の奥」でやり残した課題に取り組むかのように、裏切り者の裁きにこだわっているとしている。「闇の奥」が裏切り者の発見の物語だとすれば、『ロード・ジム』は裏切り者の裁きに取りつかれた物語であるが、テクストでは判断が先送りされている。マーロウは船乗りの行動規範から外れ、船乗りの共同体に対する「裏切り者」であるジムに対する共感と反感の間で揺れ動いている。マーロウは公の裁きを白紙に戻して延々と語り続けるが、ジムに対する道徳的判断をためらい、先送りしている。最終的に判断を避けているし、作者も審判を回避している。著者はこのことを、逃げの姿勢というよりは判断の根拠への疑問であり、徹底した判断基準への抗議の姿勢と捉えている。そして『ノストロモ』では、更に進んで「不実」という状況そのものを生み出すことが不可能な状況を作り出そうとしていると述べている。

第3章の『ノストロモ』論では、「裏切り」の問題はコスタグアナ共和国の銀をめぐる革命闘争を描く中で、国政における霸権をめぐる問題と関連づけられている。『ノストロモ』の語り手は西欧中心的な視点を相対化する一方で、自らを「我々」と呼び、ミッチャエルの視点に同化する姿も見せる。語り手は西欧の立場と同時に非西欧の立場からも語っており、西欧人の「我々」の内と外を行き来する「不実な」語り手である。このように語り手の視点は分裂しているが、自らの帰属意識に囚われている様子は語り手にはない。また主人公ノストロモは、西欧人の「忠実な従僕」であったが不実な盗人となり、デクーを孤島に置き去りにして「裏切り者」となるが、その帰属ははっきりしていない。帰属意識がはっきりしていないなら、「裏切り」を特定することはできない。著者はこのような『ノストロモ』を、帰属そのものを問題化し、「裏切り」の問題を深化させた物語と捉えている。

『ロード・ジム』において道徳的判断に苦しんだ作者は、『ノストロモ』において、判断そのものができない形式に行き着いている。語り手は自らの「不実さ」を活かして「不実な」主人公をそのまま提示している。『ノストロモ』は「不実な」視点を持つコンラッドが生んだ傑作であり、ここに「不

実さ」に対する作者の認識の深まりが見られるとしている。

第4章の『密偵』の主人公ヴァーロックは、「不実」であることを職業にする二重スパイであるが、彼の仕事としての「裏切り」行為は偶然的因素の介入によって未遂に終わっている。『密偵』においてコンラッドは、ヴァーロック家の悲劇を導入することによって物語世界を家庭の世界と英國社会に二分しているが、家庭劇の導入は語り手にとっては「我々の仲間」（英國人）の内側に侵入する為の手段である。語り手はヴァーロックについて語りながら家庭の内と外について両方から語り、その目線は二極化している。ふたつの世界を往来する語り手は、ヴァーロックよりもスパイらしいことに気づかされる。『密偵』は全くの「よそ者」というよりは、むしろ内部事情に通じたよそ者、まさにスパイによって語られているという印象を与える。『密偵』においてふたつの世界の境界線は消滅し、ふたつのドラマは重なり、語り手の位置も分からぬ。もし仲間やよそ者の区別がないなら、「裏切り」は成立しない。つまり『密偵』は裏切りが成立しないように一連の出来事が構成されていて、コンラッドはこの作品において道徳的な考え方そのものを排除しようとしていると著者は主張している。『密偵』では「裏切り」という行為がその結末に至る過程を秘密にした上で道徳的因果関係から開放しているが、それは『西欧人の目に』で「ロシア的経験」と向き合うために必要な手続きであったと著者は捉えている。

第5章の『西欧人の目に』は、ロシアを理解できない英國人の老語学教師がラズモフの日記を翻訳し、西欧の読者に語るという構造を取っているが、この作品において「裏切り」を立証することは不可能であると著者は述べている。ラズモフのハルディンに対する裏切りとその結末は、西欧人には理解できない「東方の論理」に貫かれていて、語り手はラズモフの最後の姿に許しも結論も見いだせない。語り手はラズモフの日記に「道徳」を見いだすことができない。語り手は一貫性がないように見えるが、ラズモフの日記を改編し、物語世界に関わり、「傍観者」となることによってある一貫した物語を語っている。語り手はラズモフの日記の翻訳者を自称しているが、その語り方は原典を裏切り、創作していることを示している。「自己との親しい交わり」を求めてハルディンへの裏切りを綴ろうとしたラズモフの記録には、「裏切り」のテーマにこだわり続けたコンラッドの創作行

為が集約されると著者は指摘している。原典への「裏切り」を疑わせるような語り手の態度を、著者は「裏切り者」という責めへの作者の必死の抵抗と捉えている。

最終章の「秘密の共有者」では、孤独の大海上で「溺れる」ということが不可能な設定によって、コンラッドの「裏切り者」は遂に解放されると著者は述べている。「秘密の共有者」において未熟な若い船長は、レガットという分身との出会いと別れを通して内なる疎外感を克服していく。「秘密の共有者」では仲間への「裏切り」を犯すレガットにも、その「裏切り者」を匿う船長にも罪悪感や良心の呵責らしいものが一切ない。船長の行為は船乗りの規範に従って判断するなら、「裏切り」と「忠誠」という、相反するふたつの意味が同時に生じ、これは道徳的な問題の無効化と言える。つまり、道徳的な判断基準そのものが失効している。「秘密の共有者」では、権威という考え方そのものが無効にされているのである。絶対的権威に対する批判者であった船長は、絶対的権威という根拠を欠いたまま船長としての責任を受け、航海に出る。「闇の奥」で裏切り者を発見して以来、コンラッドは裏切り者を裁く際の根拠に対する疑惑から判断を先送りし、根拠を問えないようにし、秘密にし、不条理で証明不可能なものにしてきた。「秘密の共有者」の語り手である船長は作者の分身であり、彼に仮託して道徳的判断から脱却したコンラッドの新しい旅立ちが語られていると著者は述べている。

著者はこのようにコンラッドの6つの正典を創作年代順に分析しているが、繰り返し変奏される「裏切り」の主題を単に個々の作品において分析しているのではない。ひとつの章は次の章へと有機的につながり、問題に対する作者の扱い方の変化と発展が辿れるように書かれている。「闇の奥」でマーロウのアフリカへの旅を語ることによって自らの中に「裏切り者」の分身を見出し、分身に対する道徳的判断にこだわり続けた作者は、『ノストロモ』や『密偵』では自らの不実さを語りの上で利用し始める。そしてある行為と結果の因果関係が明確に結べなくなった時、『西欧人の目に』でコンラッドは自らの「裏切り」の問題と向かい合うことができる。最終的に「秘密の共有者」では道徳的判断の根拠を無効にし、「裏切り者」である分身を解放することによって、コンラッドは意識的に道徳的思考の呪縛を

断ち切ろうとしている。「秘密の共有者」における判断基準の無効化と裏切り者の解放によって、「裏切り」という主題はコンラッドの物語の原動力としての役割を終えると著者は結んでいる。

本書はコンパクトながら、国内外の文献に広く目を通し、先行研究を踏まえ、コンラッド文学における大きな問題に真摯に取り組んだ好著である。モーザーはコンラッドが後期作品で道徳的探究をやめたことが想像力の疲弊を招いたと主張しているが、著者は「結び」で、「秘密の共有者」を道徳的因果律に囚われた西欧的思考からの意識的な脱却と見るなら、後期コンラッドにこそ新しいコンラッドらしさが見られるかもしれないと述べている。ロバート・ハンプソンのように、モーザーの理論を半世紀前の古い見方として退ける批評家もいるが、後期作品群を創作力の衰えた作品と見る批評家も多く、前期作品と比べてその研究はまだ十分に成されていない状況である。著者は現在、既に後期作品の研究に着手し、国内外に発表し、その成果を世に問うている。著者が最後に示唆している「新しいコンラッド」とは、どのようなものなのだろうか。コンラッドは全体として、後期作品群でどのような世界を「見せようと」しているのだろうか。著者の今後の研究に大いに期待したい。

(いわしみず ゆみこ 長崎県立大学教授)